たいと思う。

注1）いずれもスペイン語の改訂訳がある。
注2）ルーマニア本国では原語の文法や辞典に数多くすぐれたものが出版されているが，ここでは省略した。

（東京教育大学助教授　田中春美）

直野　敦「ルーマニア語文法入門」
（大学書林・語学文庫／1967年）¥350

わが国ではじめてのルーマニア語入門書として，本書の存在意義は大きい。日本で刊行されたルーマニア語学書は，評者の知る限りでは，これ以外には1940年に限定出版された「羅日辞典」（フロンドール・根津・林・青山共著，杏林舎印刷）しかない。著者は数年間ルーマニア本国に留学，文学・語学両方面にわたって研究を積まれたので，今日望まれうる最適任者と思われる。原田氏と同じく，本会の会員でもある。

発音の簡単な解説から始まり，21課にわたって文法のおもな特徴をもれなく挙げ，ほとんどの課に短かい練習問題をつけてあるので，自習書として便利である。付録の単語集と練習問題の解答も，大いに役に立つ。しいて不満な点を探せば，紙面の関係でやむをえないにせよ，形態論の分量に比べて統辞論についての言及が少なすぎること，例文の複雑さを考えた上での配慮と思われるが，第6課の疑問代名詞と第21章の関係代名詞は語彙上ほとんど重複するので，隣接して扱うほうが便利と思われること（げんにPopやNandrisもそのように扱っている），ぐらいのものである。参考文献（p. 13）はやや不足だが，数の割にはよく配慮して選ばれてある。ミスプリントも，たまたまこのページにNandrisのような例はあるが，全体的に見て目立つほどはない。

もちろん，この本を自習しただけで，ルーマニア語が使いこなせるようになるとはいうべくもないが，本の厚さからすればギリギリのminimum essentialsが盛りこんであり，その意味では最上の入門書といえよう。今後これを補うものとして，前述の「羅日辞典」にかわる辞書（できれば日羅も）と，程度のやさしいリーダーか文学選集の出現が望まれる。今のところは，ルーマニア本国で出ている羅英・英羅辞典や，二三の国で出ている文学選集——たとえばE. D. Tappe, Rumanian Prose and Verse (London, 1956), A. Guillermou, Textes d'etude en langue roumaine (Paris, 1960), Munteanu, Rumänische Anthologie (Halle, 1962)など——を取り寄せて補習する以外に手はない。

（東京教育大学助教授　田中春美）